四季録

小屋

小屋が好きだ。この辺りで身近な小屋と言えば、真珠養殖の作業場。折り重なる島と半島を見まがうようなリアス海岸。点在する集落のそこかしこから海に突き出した筏（いかだ）の上に建つ。そのたたずまいは、簡素ながら独自でエキゾチックな景観をもたらしている。

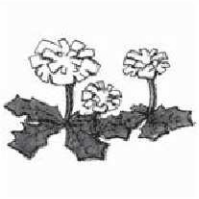
また、今はわずかに残るだけだが、廃船となった木造船の板を再利用して作られた、漁具置き場の小屋が方々にあった。海岸にズラッと並んだところなんて圧巻だった。長年にわたり、風や波にさらされたニュアンスたっぷりの船板。ゆるやかな曲線も巧みに組み合わせ、力強く頑丈な小屋に生まれ変わり、それは見事だった。

同じ建物でも対極にあるのが、たとえばノートルダム大聖堂。昨年の火災の数日後、パリに暮らし客死した友人の奥さんからメールがあった。この象徴的ゴシック建造物の痛々しい姿に愴然とし、「パリのマリア様が泣きました…」と、詩的にならざるを得ないような訴えの言葉が連なっていた。

このとき僕は、三島由紀夫の「金閣寺」が反射的に浮かんだ。若い日に読んだ焼け落ちる金閣寺と、老いに足を踏み入れた身にニュースとなって流れてきたノートルダム。半世紀の隔たりの中で二つの火が重なり、胸がざわついた。

洋の東西を問わず、時の権力で営々として築き上げた建造物の荘厳さ。人類の英知と、誇り高き職人の技の結晶。その魔力は絶大だが、畏怖を呼び起こし誘導する装置にも見える。その造形美に感動することはあっても、威光にたじろぎ、賛美しきれないものが残ってしまうのだ。

昨年の初夏、神戸での個展のため列車で出向いたときのこと。畑が続く岡山に近い辺り。だいぶ少なくなったようだが、車窓からポツンポツンと小さな小屋が見える。畑仕事の物置小屋なのだろう。どれもいわゆる子供が絵に描くような家型で、板張りやスレートで作ったもの。黒く塗ったり落書きしたり、どれもかわいく愛くるしい。



この虚飾のない小屋を見ながら、どこか切なくも、人が地に足を着けて働くありようをひしひしと思い起こさせてくれる。権威を感じさせる欠片（かけら）もない、生きる肌触りに満ちた小屋。僕にはどんな大建築より、人の核心とやわらぎを備えているように見える。

こうやって書きながら、昔買った「小屋の力」という分厚い本を思い出した。世界の小屋が撮影されていてすばらしいのだが、さらっと目を通しただけになっていた。僕は自分の展覧会で当地に赴く以外、旅をしない。久しぶりに、この本の中で小屋を巡る旅をしてみよう。

（吉田　淳治・画家）

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。